

氏 名 (本 籍)	崎 山 ゆかり	(奈良県)
学 位 の 種 類	博士 (学術)	
学 位 記 番 号	博課第310号	
学位授与年月日	平成18年 3 月24日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
	人間文化研究科	
論 文 題 目	心理療法的機能を活かした身体にふれる技法の創案と展開 ーダンス・ムーブメントセラピーにおける実践的研究ー	
論文審査委員	(委員長) 教授 佐久間 春 夫	教授 小田切 毅 一
	教授 杉 峰 英 憲	教授 森 岡 正 芳
	教授 森 本 恵 子	

論文内容の要旨

多くの心理療法の技法がある中で、身体の動きを媒体とするダンス・ムーブメントセラピーは、未だ学術的検討は不十分な領域である。特にグループを対象として実践をおこなう場合、身体がふれあうことが多用されており、Freud にはじまる精神分析学派が身体にふれることを療法上の禁忌として位置づけていることと対照的である。しかしながら、技法として身体にふれることを構造化した研究やその心理療法的意義を論じた研究は極めて少ない。

本研究は、身体にふれるという事象が有する心理療法的機能に着目し、ダンス・ムーブメントセラピーにおいて、非侵襲的で安全な枠組みのある身体にふれる技法を創案し、展開を図りながらその妥当性について検討をおこなったものである。第Ⅰ部では、技法創案のための文献的検討よりその理論的基盤を整え（第1～4章）、具体的なセッションモデルを提示（第5章）した。第Ⅱ部では対象者ごとに（第6～9章）、そのセッションモデルの妥当性について検討をおこなった。

序論では、国内外の心理療法における身体にふれることの捉え方の先行研究を総括し、心理療法において身体にふれることは、その理論や技法により、取り扱い方は大きく異なるが、その位置づけとして伝統的禁忌をふまえた否定派、否定への問題提議派、身体技法を発達させた肯定派の3分類を試みた。身体にふれることの人と人とのつなぐ相互性という基本的性質から、その心理療法的機能を肯定的に捉える必要性を明らかにし、本研究に至る経緯とその目的と意義を示した。

第1章では、ダンス・ムーブメントセラピーにおけるダンスが、対象者の身体機能に即した自由な

身体活動を保証するものであることを、文献および実践からのエピソードで明らかにした。さらにグループでの実践が、他者との時空間の共有により対人関係の端緒を開き、身体の間接を許容し、他者身体とのふれあいへとつながることを論じ、ダンス・ムーブメントセラピーにおけるダンスと身体にふれることとの関連を明らかにした。

第2章では、身体にふれることが持つ心理療法的機能の本質について検討をおこなった。精神医学者 Minkowski の統合失調症の概念である「現実との生ける接触」の喪失の状態である絶対的固定について引用し、精神疾患やさまざまな心の問題や障害により、言語的理解や意思疎通が困難となり「現実との生ける接触」を喪失したとしても、直接身体にふれることは、他者から閉ざされ孤立した絶対的固定を揺らす具体的な手段であることを示し、この点を身体にふれることが有する心理療法的機能の根幹であることを明らかにした。

第3章では、既存の心理療法において、身体にふれることをその技法に取り込んでいる身体技法に着目し、Freud から離反した Reich のオルゴン療法と、そこから派生したバイオエネジェティクス、ロルフィング、フェルデンクライスメソッド、フォーカシング、ドリームワーク、ハコミメソッドなどの技法について、身体にふれることの位置づけを総括し、その心理療法的機能について検討をおこなった。その結果、(1)セラピストがクライアントの患部にふれて直接施術するような技法の中心的手段、(2)セラピストがクライアントのよりよい動きを引き出すための補助的手段、(3)セラピストがクライアントの感情に沿いながら必要に応じて用いる手段の3つに分類できることを見いだした。

第4章では、ダンス・ムーブメントセラピーにおいて、身体にふれることの位置づけを、アメリカのダンス・ムーブメントセラピーの基礎を築いたセラピストたちの捉え方から総括し、その心理療法的機能について検討をおこなった。その結果、(1)コミュニケーションを促進する積極的な活用派、(2)グループセッションで自然発生的に用いるが特定の機能を求めない中立派、(3)退行時の母子関係の再構築のため以外には用いない慎重派の3つに分類できることを見いだされた。さらに、歌米の事例研究の中から、身体にふれることが治療的契機となった事例を抽出し、その心理療法的機能の検討をおこなった。

第5章では、身体にふれることをセッションの中で用いる場合、展開部において多用されることを指摘し、具体的な展開上の教示例と共にセッションモデルを創案した。展開部ではダンス・ムーブメントと身体にふれることの関連をふまえ、リズムエクササイズ、動きづくり、からだほぐしに着目し、リズムカルな動きの中での身体の間接から、動きづくりの中での身体の間接、さらにはからだほぐしによる相互的なふれあいという3つの段階の重要性を明らかにした。

第6章では、精神科デイケアでの精神障害者を対象とした実践からの検討をおこなった。セッションモデルに沿った具体的な身体にふれる場面を設定したセッションの積み重ねにより、決して強制することなく段階的に身体にふれることを導入することが、抵抗なく受け入れられたことについて、参

加記録や口語的なやりとりの記録から論証を試み、からだほぐしなどにより相互的な他者受容が促進されることを見いだした。

第7章では、リハビリテーション施設での中途身体障害者を対象とした実践からの検討をおこなった。ビデオ記録などから身体にふれることが対象者のコミュニケーションを広げること、個々の機能に応じた自由な身体活動を保障するダンス・ムーブメントの特性をふまえ、残された身体機能に応じて自然発生的に生まれる身体のふれあいの場面を、セラピストが意図的に活かすことが重要であることを見いだした。さらにセッションの継続経験による心理療法的効果について事例的に検討し、麻痺のある患側のセッション前後の変化とプログラムの要素の関係について重回帰分析をおこなった結果、リズムカルな動きだけでは成し得なかった心理面の活性化が、このプログラムで可能となることが明らかにされた。

第8章では、見えない（盲）聞こえない（ろう）わからない（知的）という重複障害児を対象とした実践からの検討をおこなった。セッションの展開の中で、場の理解が困難であっても、身体にふれることはメンバーとセラピストおよびコセラピストをつなぎ、彼らの場の理解を進め、動きを共有するための意志伝達的手段として活かされることを見いだした。さらに、セッションモデル通りに進行できないグループの場合でも、コセラピストと身体にふれることの重要性やその捉え方を共通理解し、互いに協力することで、重複障害で閉ざされた絶対的固定に身体にふれる働きかけで心理療法的機能の本質が活かされていることを示した。

第9章では、地域参加型リハビリテーションとして高齢者を対象とした実践からの検討をおこなった。セッションモデルに基づくだけでなく、身体機能の向上のための動きと、身体にふれることを応用して取り入れることにより、動きを他者と共に楽しむことができることを見いだされた。さらに生活機能得点のクラスター分析の結果から、介護予防につながる生活機能の向上に寄与したことが見いだされ、セッションモデルが狭義の心理療法としてではなく、幅広く活用できる可能性のあることが示された。

結章では、第1章から第9章までで得られた知見をもとに、心理療法的機能を活かした身体にふれる技法として創案したセッションモデルの理論的基盤と、その展開としての実践について総括し、本研究結果について10点にまとめた。残された検討課題としては、技法としてのネーミングやより細かなセッションモデルの提示、幼児への実践、さらに多様な対象者に対して共通して妥当性を検討できる指標の開発の3点について述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、心理療法的機能を活かした身体にふれる技法をセッションモデルとして創案し、ダンス・ムーブメントセラピーの実践において、その妥当性を検証したものである。

本論文の特色として、一つには、心理療法の領域において身体にふれることを心理療法的に活用可能な技法であると捉え、実践上の汎用をふまえ具体的なセッションモデルを創案したことがあげられる。これまでの研究では、身体にふれることは心理療法的機能を持つという視点からは十分な検討がなされておらず、ダンス・ムーブメントセラピーにおけるダンスの特性から身体にふれることをふまえ、その心理療法的機能の本質を相互性と位置づけた。二つ目として、そのセッションモデルに基づく実践を、精神障害者、中途身体障害者、重複障害児、高齢者と多様な特性を有するグループへの展開を図り、それぞれにおいて多様な視点からの妥当性の検証をおこなったことがあげられる。三つ目として、それぞれの展開が、セッションモデルを創案する際に用いた理論的背景とのつながりを示しながら検討を進められたことである。

本論文は、先行研究を総括し本研究の位置づけを明確化した序論、セッションモデル創案までの第Ⅰ部（第1～5章）、モデルに準じた対象者別の実践・展開の第Ⅱ部（第6～9章）から構成されている。

序論では、国内外の心理療法における身体にふれることの捉え方について先行研究を総括し、心理療法において身体にふれることを伝統的禁忌をふまえた否定派、否定への問題提議派、身体技法を発達させた肯定派の3分類を試み、本研究に至る経緯とその目的、意義を示した。

第1章では、ダンス・ムーブメントセラピーにおけるグループでの実践が、他者との時空間の共有により対人関係の端緒を開き、身体の近接を許容し、他者身体とのふれあいへとつながることを論じ、ダンス・ムーブメントセラピーにおけるダンスと身体にふれることとの関連性を明らかにした。

第2章では、身体にふれることが持つ心理療法的機能の本質について、精神医学者 Minkowski の統合失調症の概念である「現実との生ける接触」の喪失を取り上げ、身体にふれることによる絶対的固定からの回復が、心理療法的機能の根幹であることを明らかにした。この中で、身体にふれることの相互性から、その心理療法的機能の本質を規定するための重要な論拠を示したものと言える。

第3章では、既存の心理療法において、身体にふれることを取り入れている身体技法に着目し、(1)セラピストがクライアントの患部にふれて直接施術するような技法の中心的手段、(2)セラピストがクライアントのよりよい動きを引きだすための補助的手段、(3)セラピストがクライアントの感情に沿いながら必要に応じて用いる手段、とその機能を分類し、明確化した。

第4章では、ダンス・ムーブメントセラピーにおいて、身体にふれることの心理療法的機能について検討し、(1)コミュニケーションを促進する積極的な活用派、(2)グループセッションで自然発生的に用いるが特定の機能を求めない中立派、(3)退行時の母子関係の再構築のため以外は用いない慎重派に分類した。欧米の事例研究の中から、活用派と慎重派のセラピストが、身体にふれることの心理療法的機能を活かして実践していることを見だし、整理された知見から、第Ⅱ部の技法の展開の理論的根拠が明らかにされた。

第5章では、具体的な展開上の教示例と共にセッションモデルを創案した。展開部ではダンス・ムーブメントと身体にふれることの関連をふまえ、リズムエクササイズ、動きづくり、からだほぐしに着目し、リズムカルな動きの中での身体の近接から、動きづくりの中での身体のふれあい、さらにはからだほぐしによる相互的なふれあいという3つの段階を指摘し、そのふれあいを段階的に取り入れることの重要性を明らかにした。

第6章では、精神科デイケアでの精神障害者を対象とした。セッションモデルに沿った具体的な身体にふれる場面を設定したセッションの積み重ねにより、強制することなく段階的に身体にふれることを導入することで、からだほぐしなどにより相互的な他者受容が促進されることを見いだした。この結果は、セッションモデルの枠組みそのものの妥当性を示すものであった。

第7章では、リハビリテーション施設での中途身体障害者を対象とした。個々の機能に応じた自由な身体活動を保障するダンス・ムーブメントの特性をふまえて、残された身体機能に応じて自然発生的に生まれる身体のふれあいの場面を、セラピストが意図的に活かすことが重要であることを見だし、セッションの継続経験による心理療法的効果について事例的に検討した。その結果、用いたストレス検査指標より、麻痺のある患側のセッション前後の変化とプログラムの要素の関係について重回帰分析をおこない、リズムカルな動きだけでは成し得なかったストレスの軽減といった心理面の活性化が、身体にふれることを含む要素をプログラムに取り入れることで可能となることを見いだした。

第8章では、療育施設での重複障害児を対象とした。盲、ろう、知的障害の重複により場の理解が困難であっても、身体にふれることは、メンバーとセラピスト及びコセラピストをつなぎ、彼らの場の理解を深め、動きを共有するための意志伝達的手段として活かされることを見いだした。さらに、セッションモデル通りに進行できない場合でも、コセラピストと身体にふれることを共通理解しあうことで、重複障害によって閉ざされた絶対的固定に、身体にふれる働きかけで心理療法的機能の本質が活かされていることを示した。

第9章では、地域参加型リハビリテーションとして地域の集会所での高齢者を対象とした。「ステップアップ体操」の身体機能の向上のための動きに、身体にふれることを取り入れた。生活機能得点のクラスター分析の結果から、人とのふれあいの体験による楽しさが、独居の高齢者の閉じこもり予防に寄与できたことが示された。この結果は、セッションモデルが狭義の心理療法としてではなく、幅

広く活用できる可能性のあることを示唆するものでもあった。

以上、学位申請者はダンスセラピストとしてこれまで多様なグループを対象とした実践の積み重ねから、身体にふれることの心理療法的機能に気づき、技法として展開していくための理論的基盤を整え、長年にわたり精力的にセッションモデルの展開を進めてきた。本研究は、実践成果の妥当性の検討が対象者によって異なる点については不十分な点があるが、心理療法の技法としてこれまで禁忌とされ、着目されることのなかった身体にふれることについて、グループメンバー間の相互性から、心理療法的機能を捉え展開を図ったことは、ダンス・ムーブメントセラピーのみならず、心理療法における身体にふれることの位置づけへの新たな提言をもたらすものであると言える。

またこれらの知見は、本学の人間文化研究科年報、スポーツ科学研究の他、日本芸術療法学会誌、ダンスセラピー研究などの国内学会誌、国際誌 American Journal of Dance Therapy, Perceptual and Motor skills などに原著論文として公表されている。さらに、日本芸術療法学会、日本ダンスセラピー協会年次大会、アメリカダンスセラピー協会年次大会などでも発表されており、この分野の研究者の注目を集めている。

よって、本論文は奈良女子大学博士（学術）の学位論文として十分な内容を備えていると評価できる。